

森有礼は近代日本の黎明のときに、「近代日本」を設計し、作りあげた重要な人物の一人として広く知られている。

高い志をもって初代文部大臣という重責をみごとにやり遂げた政治家としての森有礼の姿を、後世の人々は尊敬の念をもって想起している。1886年に公布された一連の「学校令」は、森の思想を体現したものであり、その教育方針が国家主義的色彩を強く帯びたものであったとしても、その歴史的な重要性は変わるものではない。

しかし、近代日本の〈国語〉の文脈では、森有礼に対する評価は一変してしまう。

森有礼が唱えたとされる、いわゆる「日本語廃止論・英語採用論」は、かつてもいまも西洋中心主義の知識人が陥った軽率な愚論として語られることが多い。森の提言は、日本の「国語」の大切さの意味を一層強調するための戒めとして触れられることはあっても、支持されることはけっしてない。

あれほど国家の確立に情熱を燃やしていたあの森有礼が、どうして「日本語を捨て、英語を採用する」という暴論を主張したのだろうか？森有礼が提案した〈日本語廃止論・英語採用論〉は、いったいどのような内容なのだろうか？

1872年5月、森有礼がアメリカ弁理公使の任に当たっていたときのことである。国づくりに使命感をもち、意欲が漲った若き森有礼（当時26歳）は、イエール大学の有名な言語学者ウィリアム・ドワイト・ホイットニー（William Dwight Whitney）宛に一通の書簡を出す。森有礼の主張をより正確に理解するために、その書簡の冒頭部分から見てみることにする。この書簡は英語で書かれているので、ここでは日本語に翻訳する。

日本の話しことばは、帝国の人民のますます増大する必要に適合せず、音声アルファベットによったとしても、書き言葉として十分に有用にするには、あまり貧弱である。そこで我々の間には、もしわれわれが時代の歩みを共にしようとするなら、豊かで広く用いられるヨーロッパ語のひとつを採用すべきであるという考えが広まっている。」（『森有礼全集』第1巻、310ページ）

森有礼は、「商業民族」である日本が「急速に拡大しつつある全世界との交流」をすすめるためには、英語を採用すべきであるという。ところが、世間で森有礼に激しい非難が浴びせられるもととなった「日本語の廃止」については、この文章のなかで一言も述べられていない。

ややくどくなるが、もう少し森の書簡を引用してみよう。

これまでの日本のあらゆる学校は、何世紀にも渡って、中国語を用いてきた。まったく奇妙なことに、われわれ自身の言語による学校も書物ももっていない。

ここで、森有礼はむしろ、それまでの漢文中心の教育につよい異議申し立てを行いながら、日本語によるあらたな教育法を求めていたことがわかる。

たしかに森有礼は日本に英語を採用することをつよく提案していた。ところが、森の英語採用論は、後世の論者たちが言うように「西洋を崇拜するあまり西洋語を国語にしようとしたわけではない。森の提案は、きわめて実利的な理由にもとづいていた。

森は「商業世界においてアジアでも他の地域でも優越した英語のような言語を採用しなければ、日本の文明の進化はまったく不可能になる」という。つまり、「英語を話す種族の商業力」を獲得することこそ、「商業民族」である「われわれの独立保持の必須条件」であるとホイットニーに書きつづっている。面白いことに、森は日本人を「商業民族」と見ていた。この「商業民族」が開国後にも生き延びていくには、英語が必要だと考えたのであろう。

もう少しよく見てみると、森の実利主義にひそんでいた徹底した合理的考え方は、森に従順な英語崇拜者にはさせなかったことがわかる。というのは、森が理想とする英語は、いまのあるがままの英語ではなかったからである。森有礼が採用したい英語とは、いっさいの文法的不規則を取り除いた、いわゆる「簡易英語 (simplified English) であつた。

たとえば、動詞の活用では *see/saw/seen* や *speak/spoke/spoken* のような不規則変化を *see* は過去形、過去分詞系とも *seed* に、*speak* は同じように *speaked* とする、という徹底したものであつた。また、正書法に関しては綴りと発音を一致させるために、*though* ではなく *tho* と、*bough* ではなく *bow* と書くことを提案した。

このような大胆な森の提言を見て、ホイトニーはよほどびっくりしたのだろう。ホイトニーは言語学者らしくたいへん現実主義的な意見を提示した。つまり、日本が欧米文明を摂取しようとするなら、あるがままの英語を受け入れるべきであり、「簡易英語」はかえって「日本人と英語国民とのあいだの障害」となるという理由で、森の提案に反対である旨の意見を述べた。

しかし、日本語から漢文の影響を取り除く点については、森有礼とホイトニーとのあいだには、ある共通の認識があった。じつは、森の主張は、日本語と英語の関係と日本語と漢文の関係という二つの軸をどのように調整するかという観点のうえに成り立っていたのである。この点を見逃すなら、森の提案はほとんど戯画化されてもおかしくはない。

たしかに、森は「日本語廃止、英語採用」のように聞こえる議論をささなかったわけではない。それはホイトニー宛の書簡ではなく、森が英文で表した著書である『日本の教育』の序文のなかのつぎの箇所だけである。

日本における近代文明の歩みはすでに国民の内奥に達している。その歩みにつきしたがう英語は、日本語と中国語の両方の使用を抑えつつある。……このような状況で、けっしてわれわれの列島の外では用いられることのない、われわれの貧しい言語は、英語の支配に服すべき運命を定められている。とりわけ、蒸気や電気の力がこの国にあまねくひろがりつつある時代にはそうである。……日本の言語によっては国家の法律をけっして保持することができない。あらゆる理由が、その使用の廃棄の道を示唆している。（森有礼全集第1巻、266 ページ）

しかし、ことば遣いによく注意する必要がある。この最後の部分で森有礼は、「日本の言語(the language of Japan)」といており、けっして「日本語 (Japanese)」とはいっていない。森は、「日本の言語」は“Japanese”と“Chinese”、つまり「やまとことば」と「漢語」の無秩序な混合状態からなっていると信じていた。つまり、森有礼にとって「日本の言語」がすなわち「日本語」ではなかった。森有礼の古ぼけた議論から学ぶべきことがあるとすれば、それは「日本語廃止、英語採用」のような浅薄な議論ではなく、まさにこの点であろう。

ところが、どうして森有礼を取り上げた論者たちはひとりとして森有礼の主張を正確に理解しようとしなかったのだろうか？ それは、森有礼の主張の前提となった言語認識と森有礼の批判者たちの言語認識のあいだには、大きな隔たりがあったからである。

批判者たちにとって「日本の言語」はすなわち「日本語」であった。彼らにとって「日本語」は確固として存在する何ものかであった。ある言語をひとつの統一体として把握すること、それを疑うことのできない自明な前提に立てることは、それ自体、歴史のなかで作られ出された認識である。「日本語」すなわち「日本の国語」という認識も明治以降さまざまな政策やイデオロギーの洗礼を通して形成された。

森有礼は 1847 年、鹿児島で生まれだ。早くから洋学を学び、19 歳のときに薩摩藩派遣の留学生としてイギリスに渡る。その後も外国に強い関心を持ち、みずからすすんで多彩な言語経験をした。ところが、森有礼の目に映った日本の言語状況は、話しことばと書きことばの間の埋めることのできない隔たりをはじめ、地域、階層間の絶望的な言語分裂そのものだった。

このような当時の日本の言語状況で森有礼が描ける「日本語」とは、いくつかの顔が重なり合うぼやけた姿でしかありえなかった。森は「日本語」を確固たるひとつの統一体として把握することがとうていできなかったのである。

近代日本において **national language** としての「国語」は、政治的にも、文化的にも、国民的一体性を作っていくための大事な根幹になった。それだけに日本語の一体性を否定した森有礼のような言語認識に基づいた提案は、後世の論者にとって、受け入れがたい暴論として感情的な反発の的となったのである。

ここで森有礼を取り上げたのは、森有礼の不当な評価にたいして「名誉回復」するためだけではないことを言っておきたい。

わたしがはじめて森有礼の著作に出会ったのは、近代日本が生み出した言語認識の実態を解明する過程であった。「国語」という理念に収れんする近代日本の言語認識は、のちに台湾や朝鮮における植民地支配のあり方にも大きく影響をあたえた。ここで詳しく述べることはしないが、森有礼の言語認識を検討することで、近代日本の言語思想史がこれまで考えられてきたもの以外の隠された部分に光を当てることができるのではないかと思ったのである。その意味で森有礼は、小さなたいまつを掲げた孤独な言語思想家であったともいえるだろう。

私事に涉ることで恥ずかしいが、わたしが近代日本の言語認識に関する研究を一冊の本にまとめ、出版することができたころのことである。拙著が出て間もない頃、森有礼のお孫さんであり、著名なフランス文学者森有正の妹さんである関屋綾子さんにお会いする機会に恵まれた。長年平和運動に人生を捧げた関屋綾子さんは、文字通り「平和」で素敵な方だった。

関屋綾子さんのことをご紹介してくださった方から、森有礼のことを論じた章がある拙著を関屋綾子さんに差し上げるようにと勧められ、ためらいはあったものの関屋綾子さんに渡した。温和で上品な関屋綾子さんは、一瞬緊張した表情をみせた。おそらく、よくあるアグレッシブな韓国研究者の日本批判の書であるとお思いになったのかもしれない。その後、ふたたび関屋綾子さんにお会いすることはなかったが、いつか関屋綾子さんに森有礼を取り上げた意味をもっと丁寧に説明したいと思っていた。

ところが、2002年10月、関屋綾子さんのご逝去の悲報を聞いた。残念でならなかった。

森有礼の残した写真を眺めると、森有礼の凛々しい姿と真面目で鋭い目つきが印象的である。森有礼の評伝からは、森はつねに日本の近代化を考え、そのため積極的に他者に会い、他者から学び取ることに渾身の力を注いだことが読み取れる。

しかし、森有礼にとって向かうべき他者とは誰だったろうか？ おそらく、いわば文明国とされた欧米のいくつかの国の人々だけだったのではなかろうか。だからと言って、すぐにそのことを単純な理屈で非難するつもりはけしてない。なぜなら、だれにとっても、時代の限界、場所の限界からはそう簡単には自由になれないからである。

時と空間の限界を乗り越えることは、通常的感受性だけに従ってはいなかなかむずかしい。ときには慣れ親しんだものから決別する勇気も必要とする。また痛みのもとなう試行錯誤、見えなかった他者に出会い、寛容さと忍耐をもって他者と理解しあうことの苦しみを身を以って感じ、逆説的ながらそのなかから喜びを見出すことさえ要求されることもある。

森有礼は一生を通じて、自己変革・向上につとめたという。イギリスに留学した時、国に残った兄に宛てた書簡には、自己の向上のためには、心身の健康が大切なので、朝冷水で体を鍛えていると書きつづっている。まさに尊敬すべき努力家であったにちがいない。

森有礼が去ってから 125 年が経った。そのあいだ日本は森有礼が夢みた近代化を成しとげたが、その遺産の中には少なくない傷痕もある。また、世界も大きく変貌して、森有礼の知らない新たな他者や隣人も増えてきた。

一橋大学の森有礼高等教育国際流動化センターでは、森有礼先生の新しい世界を開拓していく精神を受け継ぎながら、さまざま他者とともに、刺激的で楽しい知の饗宴が行い、あらたな世界の可能性を育ていくセンターになることを願ってやまない。

森有礼先生もわたしのささやかな提案にきっと賛成して下さると思う。

一橋大学が商法講習所として出発したとき、森有礼はイェール大学から教授としてウィリアム・コグスウェル・ホイットニーを招聘して、商学に関する授業を担当してもらったという。このウィリアム・コグスウェル・ホイットニーとは、実は、書簡で森と激論をたたかわせた言語学者ホイットニーの従兄にあたる。森がホイットニーを招聘したとき、頭のなかには、若いころ無謀にも著名な言語学者に論争を仕かけたことが思い浮かんでいたのではないだろうか。そのとき森有礼は、東洋の国からやって来た無名の異邦人でしかなかった。その森がイェール大学の言語学教授に向かって、英語の改良案を堂々と披露するだけの勇気と大胆さをもてたのは、やはり若さの賜物である。壮大な夢を追いかけるのは、若者の美しい特権である。そう考えると、一橋大学で森有礼の名を冠したセンターができるのも、さらに意味深いものとなるような気がする。

イ・ヨンスク（李 妍淑）延世大学文学部卒業。一橋大学大学院社会学研究科博士課程単位取得退学。社会学博士。現在、一橋大学大学院言語社会学研究科教授。著書に『「国語」という思想——近代日本の言語認識』（岩波書店、1996 年）、『異邦の記憶——故郷・国家・自由』（晶文社、2007 年）、『「ことば」という幻影：近代日本の言語イデオロギー』（明石書店、2009 年）など。